

愛媛大学教育学部

第129号

同窓会報



愛媛大学教育学部同窓会事務局

☎ 790-8577 松山市文京町3番
愛媛大学教育学部事務課内

☎ (089)927-9383(直通) FAX(089)927-9395

E-mail : dosokai.ed.ehime@gmail.com

賀 春

元旦

愛媛大学教育学部同窓会役員一同



ご挨拶



佐野 栄

愛媛大学
教育学部長

新年明けましておめでとうございます。同窓会の皆様におかれましては、日頃から愛媛大学教育学部に多大なご支援を賜り、心より感謝申し上げます。

さて、昨年五月に元号が「平成」から「令和」に変わりました。私事ですが、私が愛媛大学教育学部に赴任したのが、平成元年（一九八九年）十二月で、元号が「昭和」から「平成」に変わった年でした。ちょうど三十年が経過したことになります。この機会に、これまでの三十年間の愛媛大学教育学部の変遷を振り返ってみたいと思います。

平成元年、卒業に教員免許取得を要しない情報社会課程（いわゆるゼロ免課程）が新設されました。その後、平成五年に大学院教育学研究科を新設、平成八年、初等教育教員養成課程を設置、ゼロ

免課程を情報文化課程に改組、平成十一年に教員養成課程を学校教育教員養成課程に改組、ゼロ免課程を芸術文化課程、生活健康課程、情報文化課程の三課程に改組、平成二十一年に、障害児教員養成課程を特別支援教育教員養成課程に、三つのゼロ免課程をスポーツ健康科学課程、総合人間形成課程の二課程に改組、平成二十八年に教職大学院新設、ゼロ免課程の要素を新設の社会共創学部に移し、学部は教員養成に特化し、そして今春、学校教育教員養成課程と特別支援教育教員養成課程を改組し、学校教育教員養成課程に一本化します。この三十年間、繰り返し組織の改編がなされてきていることをつくづく実感する次第です。

三十年前、教育学部の学生定員は三百五十名程度だったと記憶しています。それが今は、半分以上の百六十名となつてしまいました。改組の度に学生定員が減らされてきました。組織をつくり替えるためには、数年前から準備をする必要があります。学部内での検討、大学本部との意見交換、そして文部科学省との折衝・審査という手順を踏む必要があるのですが、これを繰り返し繰り返す重なることを考えると、常に、改組の検討がなされていることとなります。平成十六年の国立大学の法人化以降

は、大学改革のうねりが本格化し、とりわけ、平成二十四年に始まつた「ミッションの再定義」では、教員養成分野への逆風が特に強まり、将来の人口動態や教員採用の需要予測等を踏まえた量的縮小の方向性が強く示唆されました。この方針を受け、教育学部はゼロ免課程の廃止と教員養成課程の規模縮小が国策として方向性が示されたこととなります。そして現在、国立大学改革の一層の加速化が進んでいるところです。

大学における様々な改革の繰り返しは、組織並びに構成員の疲弊を招くだけで、いわゆる最高学府としての大学のアカデミズムのよなものが失われていくばかりであつたと考えています。私が愛媛大学教育学部に着任した当時は、まだ自由な雰囲気か漂つていました。大学教員の特権である自由な発想で自分の興味に従つた研究に専念できていたと記憶しています。ところが今はどうでしょう？

なかなか自分の好きな研究内容に自由に取り組むことが難しくなつてきているのが現実です。また、大学から配分される教育研究経費は三十年前と現在では格段の差が生じています。当時は年間約百万円程度であつた研究費が現在は約二十五万円となり、三十年前の四分の一に減つてしまいました。自分の研究に必要な経費は、科学研究費補助金（科研費）等の競争的外部資金を獲得せよ、といった風潮が高まっています。こうした過去を振り返ると、これまで大学が歩んできた道は決して発展の方向を目指しているとは到底言えないのが現状だと思ひます。

むしろ、少子化を理由に、国内の大学の規模縮小や統合再編を国が指導しているのが現実です。しかしながら、教育学部が担つてきた教員養成の機能は、たとえ学部の規模が縮小されたとしても、決してなくしてはならないものであると考えています。教育学部は教員を養成することが使命の「目的学部」です。地域の将来を担う子どもたちを教育する、学校の先生を養成するための中核的な学部であり続ける必要があります。近年、愛媛県をはじめ多くの自治体では、教員の大量退職に伴う新規採用教員数が拡大し、現在の教育学部学生にとつては容易に教員になりやすい状況になつています。容易に教員になりやすい時期だからこそ、教育学部における教員養成は一層気を引き締めて行う必要があります。単に教員を輩出することのみを目的とせず、いかに質の高い人材を教育現場に送り出すのか、学部における教育の質が問われる時代になつてきているのだと実感している次第です。また、教育学部が果たすべき役割として、地域の教育現場・教育委員会等と協力し合つて、現職教員の研修についても、一層力を注いでいきたいと考えています。そのためには同窓会の皆様のお力添えなしには実現はできません。同窓会の皆様、引き続き教育学部へのご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。

最後に、愛媛大学教育学部同窓会報への寄稿も今回で四回目となりました。これは私が教育学部長に就任して四年目になることを意味します。私の任期は今年度いっぱい입니다。この同窓会報の年頭のご挨拶がこれが最後になります。今後は、教育学部の一教員として、愛媛大学教育学部同窓会の活動にお役に立てたらと考えています。愛媛大学教育学部同窓会がますますのご発展を祈念しています。

目次

表紙	「寒椿」.....川井 正
題字	元愛大教育学部教授 菊川 國夫
「ご挨拶」	(1)
愛媛大学教育学部長	佐野 栄
心 響.....	(2)
「心の教育」の充実	
四国中央市・金生第一小学校長	松本 健吉
研究室紹介.....	(3)
「美術教育講座」	
教育学部サポーター制度.....	(5)
「障がいのある方が生み出すアート商品を」	
design company	MIDORIYA 代表
校友会ニュース.....	和泉 明子氏
愛媛大学開学七〇周年及び第一〇回ホームカミングデー	
合同記念式典・合同祝賀会	
学部トピックス.....	(9)
愛媛大学教育学部と公益財団法人愛媛県動物園協会との連携協力に関する覚書の調印式を行いました	
教育学部留学生歓迎会を開催しました	
職場だより.....	(10)
「自分ができること」	
西条市・西条北中教諭	戸田 泰裕

「心の教育」の充実

四国中央市

金生第一小校長

松本 健吉

(昭五七卒)

近年、夏の厳しい暑さや台風、豪雨による風水害の発生など、異常気象が問題となり、地球温暖化の影響が危惧されています。学校現場でも、酷暑対策や危機管理が大きな課題となっています。一方、社会に目を向けると、あおり運転や児童虐待、いじめ、ハラスメント等、人を大切にする心と規範意識の低下等による問題の増加も心配です。「心の寒冷化」が進んでいるのではないのでしょうか。子どもたちの心をしっかりと育てていく必要性を強く感じています。

心は見えませんが、行動や言葉を通して表れることがあります。ですから、行動や言葉を整えることが、心を整えることにつながると考えます。

例えば「はきものそろえ」です。私は、全校児童の靴箱を毎日見て回りますが、その時、児童の靴が語りがけてきます。靴の置き方一つをとっても、心や生活が表れているのです。心が乱れている児童は、靴を無造作に靴箱に入れてしまふので、見届けができていません。休み時間が終わった後、「次

の勉強も頑張るぞ。」という心のある児童、下校するとき「今日も一日頑張れた。」という心のある児童の靴は乱れるはずがありません。



児童の靴そろえにもいろいろあります。注意されるからそろえていた児童も、そのうちに言わなくてもそろえられるようになってきます。自分のだけでなく他の人の靴もそろえられるようになる児童もいます。両手で丁寧にそろえている児童もいます。このように、靴そろえにも広がりや深まりがあるのです。そして、靴をそろえることに意識が向く児童は、いろいろなことにも意識が向くようになります。計算をした後に見直しをしたり、文字を書くときに書き順を意識したりできます。相手や場を意識した言葉を遣ったり、友達の思いに意識が向くようになったりもします。不思議なもので、様子がおかしいな、少し心配だなと思う児童の靴は乱れていることが多いです。ですから、心配な児童

の靴は、特に丁寧にきちんとそろえ、形を整えてやるようにしています。

現任校では、心の根っこを育てるための基礎として、「はきものそろえ」の他に「あいさつ」「はいつの返事」「立腰」の習慣化にも取り組んでいます。「あいさつ」は、自分以外の存在を意識させるとともに、他の人と関わることの心地よさを味わわせることができます。「はいつの返事」は素直な心を培います。「立腰」は心の基になる氣力を養います。どれも単に行動を整えるだけでなく、意識が変わり、心を育てる土台になると考えます。

心を豊かに育てるために大切にしたいのは言葉の力です。私たち人間は、何か苦しいことや嫌なことがあると、その原因を他の人や物のせいにしてしまうことがあります。そして、「○○のせい」をいくらでも見つけ出し、心は苦しく冷たくなってしまいます。そうして、冷たく荒い言葉ばかりを発するようになると、欠点や非ばかりが目につき、悪口や不平不満が増え、好ましくない行動を起こすようになってしまいます。

同じ人や物でも、「○○のせい」を「○○のおかげ」という言葉に変えると、後に続く言葉も感謝の気持ちにつながる言葉に変わってきます。そればかりでなく、その良さが見えてきます。そして、気持ちも前向きで明るく優しくなれます。感謝の気持ちを表す優しい

言葉は、心を豊かにする力も持っているのです。感謝する心は、使えば使うほど心を豊かにしてくれます。

現任校では、感謝する言葉のよいうに、みんなの心が温かくなる「ふわふわ言葉」を遣うことについて、いじめストップ隊の児童を中心に全校で取り組んでいます。「ふわふわ言葉」が増えることにより、穏やかで優しい気持ちになり、人を大切にする行動が少しずつ増えてきたように感じます。

心の寒冷化を断ち切るためには、言葉の力は重要です。言葉はその人の心の表出です。言葉には、心が温かくなる言葉があります。優しい心は温かい言葉を生み、温かい言葉はいつまでも心に残り豊かな心を育んでいきます。

マザー・テレサも言っています。Kind words can be short and easy to speak, but their echoes are truly endless.

(優しい言葉は短く、口にしやすい。しかし、それは心に響いていつまでも消えることはない。)

未来を担う子どもたちには、いろいろな人や書物との出会い、体験を通して、たくさん優しい言葉、心が温かくなるような言葉に出会わせたいです。そのためには、温かい言葉が学校や家庭、地域で自然に飛び交うようにすることが大切です。心の土台をしっかりと育て、心の教育を充実していくことにより、心の寒冷化が抑止できることを願っています。

「教員になりたいま……」

松山市・北条南中教諭 武内香奈枝

「つながり」

東温市・北吉井小教諭 紅谷 有紀

「これまでとこれから」

内子町・小田中教諭 林 秀平

「楽しい外国語活動を目指して」

西予市・宇和町小教諭 玉ノ里美穂

「経験と学びの日々」

愛南町・久良小教諭 山本 直也

祝・叙 勲

支部活動報告…………… (15)

「八回目を迎えた落語会」

南宇和支部 若田 正 (16)

国際理解教育コースで学んだこと…………… (17)

教員 佐藤 栄作 (18)

先輩を偲ぶ…………… (18)

「あしあと(3)」

過去から現在そして未来へ

同窓会事務局

会員の声…………… (20)

「教行信証」の序

―私の現代日本語訳―

吉原 宏文 (22)

放送大学入学生募集のお知らせ…………… (22)

愛媛大学校友会からのお知らせ…………… (22)

表紙作品

「寒椿」について…………… (22)

部活動紹介…………… (23)

「愛媛大学写真部」

会報送料・寄付者名・敬弔…………… (24)

裏表紙…………… (25)

会員写真館

文芸欄

研究室紹介



愛媛大学教育学部

美術教育講座



教授 原田 義明 先生

はじめに

私のこれまでを振り返りますと、愛媛大学に赴任するまで十八年毎に大きな節目が巡って来たように感じています。まず、最初の大きな節目は、大学受験のため十八歳で上京し、一浪後に台東区上野にある芸術大学に入学したことです。大学院まで進学しましたので、都合六年間、上野のお山で学生生活を過ごしましたが、この時期の多くの「人・もの・こと」との出会いが、今の私を形成しているのは確かです。しかし当時は、就職をする気はなく、そんな訳で、卒業後は大学時代に取得した教員

的であった造形活動（作品制作）もままならず、現状の生活に限界を感じていました。そこで、ダメもとで必要書類を整えて応募をしました。結果、幸運にも採用となりました。早いもので愛媛に来て二十七年が経とうとしています。赴任当時は美術講座で一番若手の教員でしたが、今では講座で一番年長になり、感慨を深くしています。

私の研究分野について

ところで、私の研究分野は美術領域の中で「工芸」といわれる分野になります。工芸は、扱う素材や技法により、陶芸・染織・金工・漆芸・ガラス・木工・竹工・人形等、様々に分かれています。その中でも金属工芸（通称、金工）分野は、技法の上から鑄金・鍛金・彫金に分類されます。私はその中の「鑄金」を主として制作研究を続けています。

皆さまにとって工芸といえますと、陶芸や染織等が、一般的かもしれません。大学内外の様々な場面で、工芸全般あるいは自分の専門の鑄金について、お話をする機会があるのですが、よく料理をつ

くる過程（特に日本料理）に例えることがあります。どのようなことかといえますと、工芸も料理も①素材（食材）の特性を引き出しながら、②そのものに適した技法（調理法）を選択し、③表現（盛り付け方や器の選択等）に繋げる分野であり、そして、両方とも「生活を豊かで彩のある、楽しいものに変える力を有している」分野、だということです。

私の専門の鑄金については、少し硬い説明になりますが、あらかじめ準備した耐火性の「鑄型」に溶解した金属を流し込み、冷却・凝固後、鑄型から取り出し、目的物をつくる技法で、この工程を「鑄造、つくられたものを「鑄物」と呼び、全体を総称して「鑄金」という。となりますが……。この説明では、陶芸や染織ほどには親近感はわきにくいですね。でも実は、みなさんの身のまわりにも鑄物の作品や製品はたくさん存在しています。例えば、路上に設置されているマンホールの蓋、アクセサリー類やビルの外壁、柵等、美術工芸に関連したものでは、銅像や鉄瓶、茶釜、そして仏像も古来

から多くつくられており、奈良の大仏は代表的なものです。

しかし、そうはいっても、工芸分野の中でも鑄金（金工）は、一般的になじみのない分野であることは確かです。そのようなマイナーな位置付けの中、制作研究を続けています。令和元年九月には、松山市内のギャラリーで個展も開催しました。期間中には多くの皆さまにご来場いただき、忙しくも、有意義で実りある展覧会となりました。



原田義明作品展（リブ・アート）

美術教育講座の教員としての活動

大学教員の仕事は研究と教育の両軸にあります。私の場合は、鑄金技法を基軸にして制作した作品（研究成果）を展覧会等で社会に向けて発信すると同時に、この研究成果をいかに教育に還元する

かも重要な仕事だと考えています。これに関しては、鑄金技法の教材化に十数年前から取り組んできました。学校現場では教材として一般的ではない中、試行錯誤の末、初心者でも取り扱いが容易で作業工程が簡便な、低融点錫合金（ピューター）を使った鑄造表現の教材化の方法を確立しました。

十年程前からは、免許状更新講習や附属中学校での授業実践、公立中学校でのワークショップ等を実施してきました。近年は、これを学生教育の場として捉え、附属小学校での土曜学習や私が出品している展覧会の企画、公立学校や教育関係機関において、工芸ゼミ所属の学生も巻き込み、鑄金教材の普及に努めているところです。

また、二〇一五～二〇一七年の三年間、愛媛大学教育学部美術教育講座の有志が「教員」「学生」の立場を越えて、一人の制作者としての状況（いま）をかたちにし、互いに刺激し合う目的で「状況展」という展覧会を開催しました。この取り組みは、本学が掲げている「愛大コンピテンシー」の学生に身に付けてほしい五つの能力にも

合致した有意な取り組みだったと考えています。そして、毎年度末（二月初旬）には、学生の主体的な運営の下に開催されている卒業制作展（三浦美術館）も、学生教育の重要な場だと考えています。



第3回状況展
(愛大ミュージアム)



卒業制作展
(三浦美術館)

附属幼稚園での思い出

二〇一三～二〇一七年までの二期四年間、縁あって、愛媛大学教育学部附属幼稚園長を務めさせて

いただきました。実際は、私が保育をするわけではなく（当然ですが）、熱心で優秀な先生方の保育活動を間近で観察して、幼児教育の重要性と奥深さを改めて感得する日々でした。

そのような中で、唯一、私が附属幼稚園に貢献できたことがあるとしたら、私の専門である美術、工芸分野からの関わりではないかと思っています。当時も附属幼稚園では、描画活動や様々な廃材を活用した造形活動が盛んに行われていました。粘土を使った活動も普通にあり、子どもたちに「粘土遊び」はとても人気がありました。先生方からの要望もあり、年長幼児を対象に陶芸用粘土を使った粘土遊びを行いました。できあがった作品を焼成し、子どもたちに返した時のうれしそうな顔が今でも思い出されます。その後この活動は、全クラスに拡がり、「手作りタイルの絵付け」へと内容は変わりましたが、現在まで引き継がれ私も関わらせていただいています。

また、私の任期最終年（四年目）が、附属幼稚園創立百三十周年と

重なり、創立百三十周年記念事業に関わったことです。当時、園舎北側の園路が未整備な状態であったため、このスペースを有効活用して、環境整備を行うことを構想しました。併せて、美術教育の専門的な立場から、幼児が描画（絵付け）した陶製タイルを園路に埋設（設置）することで、この園路に対する親しみをもち、この空間が未来へのレガシーとなることを期待した取り組みでした。完成までには、実に多くの方々からご支援とご協力をいただきました。平成二十八年十月に、「わくわくのみち」と名付けられた園路は無事に完成し、多くの方々にお祝いをさせていただきました。この時の経験は、良き思い出であるとともに貴重な財産にもなっています。



わくわくのみち
(附属幼稚園)



タイルの絵付け
(附属幼稚園)

最後に

ここまで、工芸のことや私の専門分野である「鑄金」のこと、美術教員としての活動、学生教育、附属のこと等、思いつくままに書かせていただきました。

最後になりますが、愛媛大学教育学部は教員養成という目的を持った学部です。一人でも多くの、高い教育実践力を有し、地域の教育現場に貢献できる優れた教員を輩出することが、一番重要なミッションということになります。私は教科専門（工芸）の教員として、工芸の授業やゼミ等を通して、学生が「ものづくり」の楽しさや奥深さを体感する中で、将来、「想像力」と「創造力」を併せ持った教員になってほしいと願っています。

教育学部サポーター制度

障がいのある方が生み出すアートを商品に

— ブランド立ち上げの経緯から

展示即売会開催への軌跡



design company

MIDORIYA 代表

和泉 明子 氏

(平一三卒)

初めまして。

design company MIDORIYA 代表、a lot of OPTIONS主催の和泉明子と申します。今日は、よろしくお願ひいたします。

手元にお配りしたプリントに簡単な挨拶と講義の内容を書いていきます。ブランドを立ち上げるのになった経緯をお話するにあたり、私のこれまでの歩みをお伝えしないと説明できないところがあるので、まずはプリントの裏に書いてある私の人生グラフに沿って私のことをお話ししようと思います。

先程ご紹介いただいた通り、私は愛媛県松山市で生まれ伊予郡松前町で育ちました。小学校の高学年の時、機械の設計の仕事をしていた父が海外勤務になり、インドネシアに行く事になります。三十一年くらい前のことですが、その頃のインドネシアは日本人があまりなくて、日本語も全然通じませんでした。知らない国での文化や言語の違い、宗教、食べ物など、

はじめて「違い」について考えた経験だったと思います。

中学校は地元の中学校に入り、その後県立高校の普通科に進みました。この頃から雑誌を読むことにはまり、建築やインテリア、ファッション紙をたくさん読んでいました。そんな中で建築士になりたいという夢ができました。高校二年の頃です。理系を選択して物理や化学、数学など勉強にも力を入れていました。

ある模試の後の進路指導で、希望の大学の話になり建築の学べる大学を挙げていた私に母がこういいます。「うちは県外の大学には出しません。」

愛媛には建築を学べる大学がなかったの、それはイコール建築士にはなれないということでした。何度も両親と話しましたが、说得できず夢は断たれてしまいました。この頃から勉強をすることを中心にして、進路に悩みます。いろいろ悩んだ中で小さい頃から「何かを作る、生み出す人になり

たい。」と漠然と思っていて、それはずっと変わらないことに気づきます。地元愛媛でその夢を実現できるところを探していたら、愛媛大学教育学部に美術の教員養成課程があることを知ります。美術は昔から好きだったし、自分の制作をしたいという事だけで愛媛大学教育学部に進む事を選択しました。



そんな形で愛媛大学に進学した私は、大学生活に不満がありました。教員になりたいと思う気持ちはありませんでしたし、なぜ地元に残らないといけないのか、建築士になったかった、とモヤモヤしていました。アルバイトしてそのお金で遊んで、服を買って、美術の授業以外は興味を持てず二十歳くらいまでそんな生活でした。二回生の頃、ある先輩に出会ったところから自分の考え方が変わりました。その方は四回生で自分の制作に毎日毎日打ち込んでいて、作品が完成したら個展を開催して

いました。やりたい事をシンプルに進めていく姿がとてもカッコよく見えました。不満ばかり抱えて、グズグズしている自分の事がとても恥ずかしく感じました。

やっと落ち着いた私は三回生で一カ月教育実習に行きました。教員になることには相変わらず興味を持てないままでしたが、仲間にも恵まれ楽しく、真剣に取り組む事ができました。あの一カ月はとてもいい経験となりました。

教育実習が終わると、就職活動が始まりました。私たちの頃は今問題となっている超就職氷河期で、たくさん受けても採用枠が一人とか二人という時代でした。総合職営業の仕事の募集がほとんどで、面接を受けても受けても落ちることを経験し、就職すること、何がしたいのかに悩み結局就職活動を止めてしまいました。

また悩みの時代に入ってしまった私は、とにかく大学だけは卒業しようと思ひ卒業制作に取り組みました。無事に大学卒業はできましたが、就職先はみつかりませんでした。就職浪人を避けるため、一年だけ研究室に進むことにしました。研究生の一年は自分の制作に取り組みながら、どんな仕事に就きたいのか考えました。いろいろ仕事を探すなかで、やはり「何かを作る、生み出す人になりたい。」ことは変わらず、地元の印刷会社で制作を募集していることを見つけ、やっとどうにか就職先

を見つけました。

印刷会社はとても激務でした。朝八時半に出勤し、忙しいときは帰宅は深夜でした。制作室には窓がなく、一日パソコンに向かって仕事をしていると時間の感覚も、外の様子もわからないような環境でした。忙しい月は一カ月の残業が百二十時間を超えることもあり、そんな職場でしたが、働く人たちはいい方が多く、何かを生み出しているということが嬉しくて、仕事はとても充実していました。

仕事に慣れてくると、会社のしぐみに疑問を持つようになり、制作部は営業さんからの情報をもとにいろいろな物をデザインしていきます。直接お客様と打ち合わせができないので、どんなことを求められているのか、ご要望にお応えできているのか、わかりにくい部分がたくさんありました。直接お客様と打ち合わせをして、的確なものを制作したいという気持ちが強くなり、せっかく就職した会社をたった一年たらずで辞めてしまいました。それが二十四歳のときです。

会社を辞めてから、フリーター生活をしながらかの仕事を探しました。たまたま見つけたライター事務所の面接にいき、即採用のご連絡をいただきました。採用日まで数日、手伝いに来てみる？と誘っていただきバイトとして働く事にしました。

テープ起こしの仕事をして三日目、自分のしたいことだったのか、という疑問が出てきました。自分はどうしたいのか、何がしたいのか、と立ち止まってしまい、採用前にその事務所を辞めてしまいました。そして、またフリーター生活に戻りました。その後ももう一社就職しましたが、やはり二ヵ月あまりで辞めてしまい、ついに一年で三回も仕事を辞めるという事になります。その時、私はなんでこんなことになるんだろう、自分は社会不適合なんだと随分悩みました。

悩みながらフリーター生活を続けていたとき、一本の電話がかかってきました。採用前に辞める事になったライター事務所のライターさんからでした。数日しかいなかった私のことを覚えてくださっていて、「君、デザインの仕事がしたいんだよね?」と聞いてくれました。「はい!」と答えると、「実は知り合いの飲食店のマスターがお店のメニュー表を作りたいらしく、良かったらやってみない?」とお仕事をくださりました。どん底にいた私は、嬉しくてそのお仕事を一杯頑張りました。その結果、とても気に入っていただき、次のお客様を紹介してくださりました。こんな形で、私のデザイナー人生は始まりました。二十五歳の頃でした。

それからは、人が人を紹介してくださり、ご縁が繋がって、いろいろな仕事に恵まれました。仕事をする中でいろいろな方と出会い、世界が広がっていききました。そしてデザインの仕事だけで生きていけるようになったのが二十七歳の頃です。

フリーのデザイナーとして仕事をする中で、いろいろな業種のお客様と仕事をするようになりました。その中に障がいのある方々を支援するのNPO法人さんや施設のスタッフもありました。例えば、職員の方の名刺をデザインしたり、その施設で作っているクッキーのパッケージ用のシールをデザインしたりしました。仕事を通して関わっていくなかで、問題点が見えてきました。このクッキーはどこで売るのが、いくらで売るのが、果たしてそれで利益になるのか、等です。疑問点を感じながら、でもどうしてもいいのかわからないのはわかりませんでした。

三十歳を前に仕事はピークに忙しくなりました。目一杯働き、充実していましたが、このまま仕事を続けていくのか、それとも一度立ち止まりこれらの人生を考えてみるのか悩みました。結婚もしたいし、子どもも産みたいと思います。仕事を整理していくことにします。そして三十一歳で結婚し、三十代は家庭と子育てを中心に、空いた時間でできる範囲の仕事をすることにしました。

子どものことが落ち着いてきた三十八歳、今までの仕事の経験と

人脈をつかって、これからまた仕事を再開したいと考えるようになります。自分が培ってきたことで何ができるか、何をしたいか思い描くなかで、仕事で出会い気になつていた障がいのある方々のことを思い出します。NPO法人さんや事業所さんの環境や世界がまだまだ開けてなく、社会との接点も少ないと感じていたので、何か還元できることがあるのでは、と思うようになります。デザイナーとしてできることは何か、何をサポートすることができると、いろいろ考えた結果、アートのこと、そして何かを一緒に生み出し商品化することなら、私の今までの経験を生かしてサポートすることができると強く思うようになります。

そんな想いを持つようになったとき、愛媛県の障害福祉課から一通のメールが届きます。県主催のイベントで、障がいのある方々と地元のデザイナーがチームになり四十八時間で商品化のプランを考えろという内容で、参加できるデザイナーを募集しているというメールでした。これはまたとないチャンスだと思い、すぐに参加することを決めました。結果、このイベントに参加したことで、県内の障がいのある方々のアート活動のを知ることができ、繋がりがたくさんできました。

このイベントでの経験や出会いをもとに、四十歳の誕生日に障

がいのある方々のアート活動をサポートするブランド「a lot of OPTIONS」を立ち上げることにあります。長くなりましたが、こまでがブランドを立ち上げることになった経緯です。

ブランドを立ち上げ、これからどのように展開するか考えました。

まずは資金が必要です。はじめ自己資金を投入してやってみようと思いましたが、自分がしたいと思うことを、すべて自己資金でやってみようと、なんだか自己完結みたいになるのではないかと、思いました。そこでクラウドファンディングに挑戦することを決めます。資金提供をお願いすることに抵抗はありましたが、いろいろ悩み考えるなかで、自分の為に金を出して欲しいとお願いするのはなく、その先にいる障がいのある方々の為に資金を提供して欲しいと声をあげるならできると思えました。悩みながら挑戦した結果、無事に希望金額に達し資金を準備することができました。クラウドファンディングをつかったことで、私の考えた事に賛同してくれる方がいること、必要としてくれる人がいることを知る事ができ、とても心強く、活動の原動力になりました。

資金の準備が整い、本格的にブランドの商品を作り始めました。県内のいろいろな事業所を回り、賛同してくださる事業所さん

と、そこにいらっしゃるアーティストさんと商品を相談しながら作りました。

その過程はとても楽しく、充実したものでした。できた商品はブランドの2020collectionとして販売していきます。

まずは一年で、ブランドを立ち上げ、資金を調達し、商品をつくり、ギャラリで発表することまでできました。来年はこの商品をもっていくことを頑張っていくと思います。そして嬉しいことに来年三月には伊予鉄高島屋内の東急ハンズさんの期間限定ショップの開催が決まっています。こちらに持つてきている商品が東急ハンズさんで販売されますので、是非興味を持った方は観に来てください。

そしてこれからもこのブランドの活動を応援して欲しいです。今日はこんな機会をいただき、ありがとうございます。以上です。

(二〇一九年十一月講演)





愛媛大学開学70周年及び第10回ホームカミングデー

合同記念式典・合同祝賀会



ホームカミングデーは、卒業生の皆様や教職員OBの方々にお越しいただき、大学の施設見学や同日に行われた学生祭に参加いただくなどして、母校へのご理解を深めていただくことを目的に平成22年度から実施し、今回で10回目を迎えました。さらに本年は愛媛大学開学70周年にあたるため、70周年記念行事と合同で計画し、平日ではありましたが開学記念日にあたる11月11日(月)に実施しました。また、式典会場も大学構内ではなく市内のホテルであったため式典参加者数を制限せざるを得なく、会員の皆様にはご迷惑をおかけいたしました。ご意見をいただいた会員の皆様ありがとうございました。

【開学70周年記念式典】

記念式典では、大橋学長から「愛媛の地の拠点」として愛される大学を目指すとの式辞の後、生田文部科学省高等教育局国立大学法人支援課視学官から大臣祝辞の披露、中村愛媛県知事、高橋校友会会長から祝辞がありました。



大橋学長



高橋校友会会長



中村知事

特別講演では、講師にテレビやラジオ等で活躍されている俳人・エッセイストの夏井いつき氏をお呼びして「俳句で育てる心と言葉」と題して句会ライブ、おうちde俳句などを通して17音に凝縮される心と言葉についてご講演いただきました。



贈呈式

また、基金感謝状贈呈式では、大学の教育環境整備事業への支援に対して、感謝状が贈呈されました。



夏井いつき講師



チアリーディング部



ダンディーズ



附属小・中コーラス部

校友会ニュース



その後、教育学部附属小学校コーラス部、同中学校コーラス部、大橋学長や高橋校友会会長も所属するダンディーズの合唱、チアリーディング部によるエネルギー溢れるパフォーマンスと70周年のお祝いムードを盛り上げました。

【合同祝賀会】



鏡開き

合同祝賀会では、若林70周年・広報担当副学長の開会挨拶の後、佐伯愛媛県商工会議所連合会会頭、三木元学長の挨拶の後、各同窓会会長も加わりお祝いの鏡開きを行いました。

その後、小松元学長の乾杯により開演しました。



祝賀会は立食形式で行い、各学部長からのメッセージ、記念品や愛太ブランド食品(吟醸イーポーク、スマ(伊予の姫貴海)、えみかビール)の紹介、楽しく賑やかな懇談の中、応援団による大学応援パフォーマンスと学歌斉唱によりお開きとなりました。



愛媛大学教育学部と公益財団法人愛媛県動物園協会との 連携協力に関する覚書の調印式を行いました

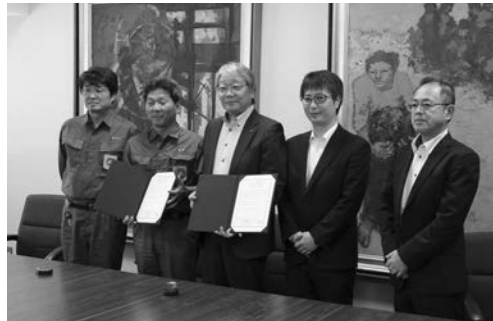
【6月25日(火)】

学部
トピックス



令和元年6月25日(火)、愛媛大学教育学部にて、愛媛大学教育学部と公益財団法人愛媛県動物園協会との連携協力に関する覚書の調印式を行いました。公益財団法人愛媛県動物園協会の前田洋一理事（愛媛県立とべ動物園園長）、同協会の宮内敬介教育普及課長が出席のもと、佐野栄教育学部長と前田理事が覚書に調印しました。

愛媛大学教育学部と愛媛県立とべ動物園は、これまでも連携協力を行ってきましたが、本覚書の締結により、さらなる連携強化を図り、教員養成の高度化と地域活性化に貢献するよう、努めてまいります。



教育学部留学生歓迎会を開催しました

【10月30日(水)】

令和元年10月30日(水)、教育学部本館2階会議室で、教育学部留学生歓迎会（後学期）を開催しました。教育学部では、今年度、後学期から新たに6人の留学生を迎え、現在12人の留学生が在籍しています。歓迎会には、留学生、教育学部長、指導教員、国際交流委員会委員、留学生チューター、事務職員など総勢30人以上が一同に集いました。

国際交流委員会委員長の熊谷 隆至 教授の司会のもと、佐野 栄 教育学部長の歓迎挨拶があり、乾杯でパーティが始まりました。その後、留学生が紹介され、それぞれ日本語で自己紹介を行いました。歓談を通して交流が行われ、和やかな雰囲気の中で親睦を深めることができました。留学生の皆さんにとって、本学で過ごす留学生活が有意義なものになるよう願っています。



乾杯の様子



歓迎会の様子

職場だより



自分にできること



西条市
西条北中教諭
戸田 泰裕
(平三〇卒)

教員となり一年半が過ぎようとしています。たった一年半かもしませんが、自分にとっては、人生において最も濃く大変で、様々な経験をするのできた期間でした。大学を卒業し、不安いっぱい西条北中学校に着任しました。初めての職員会議、初めての学級担任、初めての部活動指導など、毎日が初めてのことで、日々の教員生活を過ごすことで精一杯の一年目でした。本年度は、仕事に少し慣れてきた中で、昨年度はなかった仕事を任されるようにもなりました。二年目といえども、学校の中心となりやっとなかなくはいけない自覚と責任も芽生え始めました。そんな日々を送っている私ですが、今回の原稿依頼をいただいたことをきっかけに、「私はどうして今の職業に就いたのだろうか。」ということ

について改めて考えました。本題に入る前に、私自身が教員を目指した理由について書きたいと思います。

私は幼少期からスポーツが大好きでした。小学校では、ソフトボール、水泳、柔道を習い、中学校では軟式野球、高校・大学ではバスケットボールをしていました。その中でも印象的で、思い出に残っているのが中学校でした。また両親が教員だったこともあり、学校のことにしてもよく話を聞いていました。野球を教えることができ、そして少し得意だった英語を生かせる職業は、中学校教員かなと思ったのが、今の職業を目指したきっかけだったと思います。そして高校時代には、教員という目標が一度も変わることもなく、地元の愛媛大学の教育学部に必ず進学するという思いで勉学に励みました。

そして大学進学後、自分自身を変えの一つの出来事がありました。それは愛媛大学附属中学校で行った、教育実習です。そこで感じたのは、自分は教員に向いていないのではないかということです。実習での最初の二週間は、子ども

たちとの関わりも、授業も全く自分の思い通りにいきませんでした。一方で周りの実習生は、子どもたちとの関わりも、授業もうまくいっているように見えたこともあり、教員を目指すのは諦めようと思うこともありました。しかし、そんなときに支えとなったのは実習を担当してくださったある先生の「背伸びはせず、自分にできることを精一杯やるのが大事」という一言でした。私は教員となつてこの言葉を一度も忘れたことはありません。この言葉によって、気持ちがすごく楽になりました。自分ができることに集中することができ、授業も、子どもたちとの関わりについても、少しずつですが自信をもてるようになっていきました。その後、愛媛県の教員採用試験に合格することができ、翌年から今の学校で勤務することが決まりました。

また。自分がやるべき仕事をいつも、示してくださいました。クラスの子どもたちは本当に素直で、楽しくコミュニケーションをとることができ、しんどいときに頑張ろうと思えるモチベーションになりました。そんな日々が続き、今に至るまで、自分なりにできることを精一杯やってきました。ほんの少しですが、私自身でできることが増えてきたと実感しています。

一学期スタートの当初は、授業に、学級経営に、一日一日がものすごいスピードで過ぎていき、ただただ最低限のことをこなすことに精一杯の日々でした。自分ができることがあまりにも少なく、不安とプレッシャーに押し潰されそうになることもありました。でもそんなときに助けてくれたのが、周りの先生方とクラスの子どもたちです。いつも周りの先生方は忙しい中自分に声をかけてくださり

部活動は昨年度に引き続き、剣道部の顧問を担当しています。剣道については未経験のスポーツです。昨年度に剣道部の顧問と知ったときは、複雑な気持ちでした。技術指導もできず、ルールもわからないため、自分にできることはないのではと思っていました。そのため練習にも入らず、一歩引いて練習を見守っていました。しかしそれではいけない、何か子どもたちが一つでも多く達成感を味わうためにできることはないかと考えた結果、自分も一緒に練習していこうという結論に至りました。今では毎日防具をつけ、子どもたちと同じ練習をしています。子どもたちと一緒に汗を流す中でコミュニケーションをとる機会が増えたり、剣道をより知ることができたりしていることに喜びを感じています。また、普段の学校生活では見られない、部活動だけで見

せる生徒の姿を見ることができなので、やはり部活動は大切だと改めて感じています。そして今では剣道部の顧問で良かったとも思います。

一年半教員生活を送ってきて、自分が目指すべきところはどこなのか、自分が優れているところは何かについては、正直分かりません。ただ言えるのは、毎日変化する子どもたちのために、授業、学級経営、部活動運営など、自分ができることを精一杯することが一番大切であるということです。まだまだ未熟で迷惑をかけてしまうこともあると思います。日々先輩の先生方の指導や助言を聞き入れ、教員としてステップアップしていけるように努力していきたいと思っています。

毎日忙しい日々ではありますが、これから長く続いていく教員生活の中で、子どもたちと共に成長していきたいです。

793-0027 西条市朔日市
(四〇〇一)



教員になりたいま……



松山市

北条南中教諭

武内香奈枝

(平二三卒)

私が最初に教員になりたいと思ったのは、中学校の三年生の時である。その時の学級がとても楽しくて、良いメンバーに恵まれていた。また、担任の先生（現在は指導主事をされており、今年度、授業を見ていただくことができました。）が大変熱心に私たちの指導をしてくれた。そんな先生と同じ教壇に立ちたい、と思ったのが教員になりたいと思ったきっかけだった。修学旅行で行った京都の鈴虫寺でも「中学校の先生になれますように」とお願いしたことを今でも鮮明に覚えている。そのまま、なんとなく高校も普通科に進学をし、大学を受験し、愛媛大学教育学部に入学することができた。「教員になりたい」という思いを持ったまま大学に入学し、素晴らしい先生方や先輩、同回生の

友人と毎日楽しく四年間過ごすことができた。

しかし、一回生の後半からだろうか、「私は教員には向いていない……」と感じることが多くなっていった。周りの友人達は、演奏の技能も高く、賢かった。私はと言うと、バイトに明け暮れ、ピアノの練習もろくにせず、学業への取り組みはいまいちだった。そんな自分は、「教員には向いていないだろう、子どもの前に立つほど立派な人間ではない。」という考えから、あつさりと教員を目指すことをやめた。そして、就活をし、十数社も落ちたが、やつとの思いで合格した地元のディーラーで営業することになった。

その仕事は楽しかった。老若男女、様々なお客様といろんな会話をし、勉強になったこともたくさんあった。たくさん売れる月はほとんどん話が舞い込んできて、あれよあれよと売れた。でも、三年目ともなると、会社から与えられる「ノルマ」が日に日に苦しくなっていく反面、ぱたつと売れなくなった。どうしてもやり遂げられないのに、やり遂げなくてはならないノルマが私を苦しめ、会社で

泣くことも多くなっていた。石の上にも三年……というので、三年は頑張ろうと思っていた仕事だったが、自分の限界を感じ、ついに転職を考えるようになっていた。その頃、大学時代の友人達は教員として活躍しており、現場で生き生きと仕事をしているのを見聞きする機会も多かった。そんな影響もあり、ついに講師になることにした。

今赴任している北条南中学校は講師の時と今回で二回目の学校である。講師の時、初めて一年間を通して働いた学校が本校である。私の第二の母校のような学校だと感じている。先日、講師時代に受け持っていた部活の生徒が高校卒業後の進路を報告に来てくれた。わざわざみんなで予定を合わせて、時間を作ってくれたことがとても嬉しかった。進路の話と同じくらい、中学時代の思い出話もしてくれた。彼女たちにとって、私の存在がどうであったかはつきりとは分からないが、卒業して数年経っても覚えてくれていたことが嬉しかった。

教員の仕事にはかつての私が苦手だった目に見える「ノルマ」は

ない。それと同時に、営業時代のように、目に見える「成果」はすぐには表れてこない。現在の自分の学級を振り返ってみると、毎日毎日同じことを言っても直らず、期待しては裏切られ、の繰り返しで、毎日毎日「成果」を感じられていくわけではない。もちろん、自分の助言により、問題が解けるようになったり、演奏技能が向上したりと「成果」を感じられることもある。しかし、多くの場合は子どもの変容を数値で測ることは難しいし、教員が日々の自分の「成果」を自分自身で感じることも、私が経験した前職よりは難しいのではないかと思う。

よく先輩の先生に言われることだが、「教員の仕事は長い目で見たときに成果があらわれるものである」ということを今ひしひしと感じている。教員になって一年目や二年目の時にはなかなか感じられなかったが、時を経て、この言葉の意味にしっかりと領けるようになった。

大学を卒業してもうすぐ十年になるが、前職よりも教員歴の方がすっかり長くなってしまった。結婚し、出産し、復職して、独身時

代のような働き方ができず、家庭と仕事の両立に悩むことはたくさんあるのだが、やはり今の仕事が好きだなと感じている。そして、この先も続けていきたい。大学時代に教員を目指すのをやめたときの理由の「立派な人間」には今でも到底なりきれしていない。思うようにいかないこともあり、このままで良いのか、と思うことはたくさんある。しかし、少し回り道してきた私だからこそ伝えられることがあるのではないか、それを私なりに伝えていきたい。いのではないかと考えている。

前職は、数値だけが前面に出て、それで人間まで評価されている感じだった。でも、教師は違う。自分がやった分だけ、生徒から必ず返ってくる、それが、教師の「成果」であり、仕事のやりがいなのだろうと、改めて感じている。現在、かつての自分の夢だった「中学校の先生になれますように」を叶えることができている。今の私の夢は「子ども達の夢を叶える手助けをすること」である。小さなことでも、何か生徒の心に残る教師でありたいと思っている。

つながり



東温市
北吉井小教諭
紅谷 有紀
(平三二卒)

私は保育園のときからピアノを習っていた。その教室にはダウン症や知的障がいの子どもたちもいた。発表会でその子どもたちの演奏を聴いて、「すごい」と思った。そして、中学校の部活で、私は箏部に入った。その部活では、特別支援学級の生徒と一緒に発表会をする機会が年に数回あった。そして、障がいのある子どもたちのことを勉強したいと思い、大学では特別支援教育を専攻した。

三回生の二学期、附属小学校と附属特別支援学校の教育実習を行った。朝から下校するまで休みはない。児童生徒が下校した後から同じ学級に配属されている仲間と教材研究をした。特に、特別支援学校の教育実習では、三人の学生と研究授業をすることになり、一学期から教材研究が始まった。ミリ単位で教具を調整したり、生徒の特性を生かせるような授業展開を工夫したりした。多くの先生からの温かい励ましや助言があり、研究授業を終えることができた。授業後、ある生徒が「みんな

頑張った」と振り返り、胸が熱くなった。先生の大変さよりも、子どもたちの成長を、子どもや先生と共有できる充実感や一体感がとても嬉しかった。

大学院では現職教員と共に大学のときよりも専門的な特別支援教育を学んだ。また、研究室などで話をする中で、特別支援教育の難しさやもどかしさを感じた。そして、自ら学ぼうとすればするほど、先生や友達と一緒に考え、悩んでくれて、ありがたかった。特別支援教育を学び、特別支援教育の考え方や支援の方法などが通常学級にも求められていることを感じ、小学校教員の道へ進んだ。

通常学級にも支援を必要とする児童生徒がいることについて、大学や大学院の授業で学び、その子どもへの対応について様々な講義を通して考えてきた。しかし、いざ担任となり、支援を必要とする児童を目の前にすると、学生時代に考えていた漢字学習や計算や数量概念などの支援方法は十分にできていないと反省することが多い。私の学級は交流学級となつているため、特別支援学級の児童が二人いる。交流授業のときに、学生時代に学んだことが十分にできていないことにもどかしさを感じている。講義の中でたびたび「子どもの得意を生かす」ということを言われた。交流学級の児童を含め、子どもの特性は分ってきたような気がするが、生かしきれてい

ないと思う。

現在、特別支援学級の児童二人がいくつかの教科の授業を受けに來たり、一緒に給食を食べたりしている。私の学級は優しく温かい気持ちの児童が多く、特別支援学級の児童が困っていたら、「どうしたの」と優しく声をかけている。そして、みんな同じ学級の仲間であるという意識もあり、一緒に学習したり活動したりすることを楽しんでいいる。特別支援学級の二人の児童も、私の学級の居心地のよさを感じているようで、とても嬉しい。それはみんなの純粋で温かい気持ちによって成り立っている関係性であると思う。

学生時代に発達障がいなどについて勉強し、その子らはもちろんのこと、定型発達の子にも、コミュニケーション能力や体の使い方が大切であると感じた。そのため、体育の授業では、手押し車や、じゃんけんリレーなどを取り入れている。また、将来社会生活をする上で、食事は大切であると考え、食缶の運搬や配膳に支援員と共に力を入れて取り組んでいる。私の学級の児童も、特別支援学級の児童と共に力を合わせて給食の準備をしたり、一緒に給食を食べたりすることを楽しんでいる。

私は今、四年生の学級担任をしている。四年生は総合的な学習の時間に「みんなにやさしいわたしたちのまち」をテーマに、障がい者について学習をしている。視覚

障がい、聴覚障がい、肢体不自由を中心に、調べ学習をしたり、障がい者疑似体験をしたり、それらの障がいの方と交流をしたりして、福祉について理解を深めている。ときどき、私が大学や大学院で学んだ知識を少し教えると、調べて分からなかったことなどについて、納得することが何度もあった。例えば、手話は本で見ただけでは、手の向きや動かし方が分かりにくい、私が指文字や簡単な挨拶を実演して教えたり、解説をしたりすることで、手話って便利だな、楽しいなと思えたようである。また、インタビューをした

レビューをしている。質問して聞いた内容を授業で伝えると、一生懸命メモを取っている。特に、音声信号機や、点字の習得についての話は驚きが大きかったようである。大学や大学院で勉強したことや、人との出会いの縁が、このような形で生かされて、嬉しい。私にとって、平成は学校や習い事で多くのことを学ぶ時代だった。そして、新たな元号令和。令和元年が教員一年目。令和がどんな時代になるのか分からないように、私の教員生活もどうなるのか分からない。中二のときの担任の先生が俵万智の「まだ何も書かれていない予定表何でも書けるこれから書ける」という言葉を教えてくれた。まさに、今の私はその状態。これからどんな予定が書かれるのか、どんな思い出が作られるのか楽しみである。



これまでとこれから



内子町 小田中教諭
林 秀平
(平二七卒)

今年度、新規採用教員として、内子町立小田中学校に赴任しました。愛媛大学教育学部総合人間形成課程国際理解教育コースを卒業し、伊方町立瀬戸中学校で教育活動指導員として三年間、西予市立宇和中学校で常勤講師として一年間勤務しました。

私は、内子町出身であり、教員としてふるさである内子町でスタートを切ることができ、大変うれしく思います。今年度より勤務させていただいている小田中学校では、私が中学生の頃や大学生の時の教育実習でお世話になった先生方と一緒に、お世話になった分恩返しができればと思いつながら、助けていただくことばかりの毎日を過ごしています。少しでも恩返しができるよう毎日の生活を学びの機会として捉え、頑張りたいと思います。

教員になるまでの自分自身の人

生を振り返ってみると、英語教員への道がつながっていたように感じます。

私が教員を目指すようになったのは中学生になった頃のことでした。中学校に入った私は、小学生の頃から勉強していた事もあり、英語が得意教科になりました。友人に分からないところを教えて感謝されたり、A L Tと会話をすることができたりと、私はますます英語が好きになっていきました。この頃から中学校の英語教師として、将来は中学生に英語を学ぶ楽しさを教えたいと考えるようになりました。

高校生になり、中学生の頃よりも難しい表現を学ぶようになり、この頃から大学では専門的に英語を勉強したいと考えるようになりました。

大学生になり、幼い頃から好きだった英米文学を英語で読んだり、専門的に英語の文構造を学んだりする事で、ますます英語が好きになっていきました。

私の中で英語に対する認識が変わったのは三回生で行ったシアトルへの一か月間の短期留学がきっかけでした。日本では見たことがない景色を眺めたり、大学の授業

を受けたりして異文化を体験することができました。留学中の授業では英語のみを使わなければならず、最初は自分が伝えたいこともうまく伝えられず、悔しい思いをする時もありました。一か月の生活の中で自然と会話ができるようになり、それまで私にとって、英語とは学習する対象でしたが、学習をするため、コミュニケーションを取るためのツールとなりました。

今年一年は学びの一年だと感じています。

私は中学校一年生を受け持っています。個性豊かなメンバーがそろっており、とても楽しい毎日をお過ごしできています。

私が勤めさせていただいている小田中学校は全校生徒三十九名ととても少ない人数です。

人数が少ないからこそ他学年との交流が多く、先輩の姿を見て成長することが多いことを感じます。先日行われた運動会では、二年生と合同で学年種目を行い、一生懸命に頑張る二年生の姿を見て、日に日に頑張る競争に臨む生徒が増えてきました。そんな一生懸命に頑張る生徒の姿を見て、「この子たちと一緒に自分自身も

成長していきたい。」と思いをもちました。

運動会を終えて、さらにうれしいことがありました。応援練習や競技の練習でお世話になった三年生の先輩に寄せ書きをしたいと私に言ってきました。私は運動会まで、私が受け持っている一年生は受け身の生徒が多く、自分たちから積極的に動くことができないと思っていたいました。しかし、お世話になったことに素直に感謝し、その気持ちを行動で表したいと考えることができるようになっていました。

私はとてもうれしくなり、学級全体で寄せ書きをしないう級全員がやりたいと言い、寄せ書きを作るようになりました。学級全体が感謝の気持ちを行動に表すことができるようになっていました。

このとき、私は「四月にはまだまだ小学生だと思っていたのに、しっかりと中学生として成長することができているな。」と感じることができました。それと同時に、「この学級と一緒に成長していきたい。」と考えるようになりました。

四年間教育現場にたずさわらせていただいていたことが、今年度

学級担任や学校図書館主任など初めての仕事ばかりで、毎日が試行錯誤の連続だと感じています。毎日できていないことや失敗ばかりで、同僚の先生方や生徒達に迷惑をかけてしまっていることばかりです。できていないことを悔やむのではなく、一つ一つできることを増やしていきたい、生徒とともに成長していきたいと思っています。

受け持つ生徒が三月に「この学級、この部活動で良かった。」と思えるようにするには何をすればよいのかを考え、生徒とともに悩み、考え、成長していきたいと思っています。



楽しい外国語活動を 目指して



西予市

宇和町小教諭

玉ノ里美穂

(平二二卒)

子どもの頃、ローマ字が好きではありませんでした。私は、「ひらがなもかたかなも漢字もあるのに、なぜローマ字なんて勉強しないといけないのだろう。日本語だけで十分。」と思っていました。(我ながら、いやな感じの子どもだったなあと思います……)

ちょうどその頃、母が出産を控え、病院に入院中でした。ある日私は、一人でバスに乗り、母に内緒でお見舞いに行きました。突然の私の訪問に母はとても驚いたものの、喜んでくれました。そのとき、勉強中のローマ字について、私がどれだけいやだと感じているか熱く語ったのです。(今思えば、他にもっと話すことがあっただろうにという感じが……)

すると、母はノートを広げて、リンゴや小鳥のイラストを描きながら、ringo-apple、tori-bird

の違いについて分かりやすく説明してくれました。また、ローマ字だけでなく、英語という言語のおもしろさについても教えてくれました。英語が身近なところになくさん使われていること、母の好きな洋楽曲のこと、英語が話せるようになることと世界中のたくさんの人と友達になれること……。母の話を聞き、ローマ字に、そして英語にもどんどん興味が湧いてきました。それから、ローマ字の学習が楽しくなり、自主学習をしたり、あれこれと自分の持ち物にローマ字で名前を書いたりしました。

中学では、三年間、同じ先生が英語を受け持ってください、優しく教えてくださったことで、さらに英語が好きになっていきました。高校生になってからの英語は、難しくて時折くじけそうになりつつも、好きだという気持ちがあったからこそ頑張ることができました。

こうして、英語が大好きになった私は、大学進学後、英語の免許を取ることに決めました。様々な講義で多くのことを学びましたが、どの講義も本当に楽しくて、夢中で学んでいたことを今でも鮮明に思い出します。特にI先生の

講義は、九十分があつという間に感じられるほどでした。大学時代、意欲的な仲間たちと共に英語を学べたことは、私にとって大きな財産だなあと 생각합니다。

前置きがかなり長くなってしまいました……。私は、今年度で教職十一年目を迎え、縁あって母校で勤め始めることになりました。思い出のいっぱい詰まった校舎で働くことのできる喜びを噛みしめながら、充実した日々を過ごしています。母校での私の大きな仕事は、「外国語専科」です。三・六年生の全十二クラス、約三百三十名の子どもたちと一緒に学んでいます。なんと、週三回ALTが来校するという恵まれた環境にあり、子どもたちは、ALTと一緒に勉強することができのをとて、楽しみにしています。

多くの子どもたちと関わるということで、難しいこともありま。最初の難関は、顔と名前を一致させることでした。(残念ながら、二週間に一度しか授業がない三・四年生は、いまだにコンピュータでできていません……。)また、楽しい雰囲気や授業を行いたいと思っても、授業前に何かトラブルがあったときもありま

す。各学年三クラスずつあり、同じ学年でもクラスによって雰囲気や異なるため、授業が同じように進まないこともしばしばです。また、特別な支援が必要な子どもも多く、担任の先生方や支援員さんとの協力体制が必要不可欠です。

このように、困難なことも正直ありますが、それに勝る喜びがたくさんあります。子どもたちは、素直で明るく、とてもかわいいです。廊下を歩いていると、「ハロー。」「次の外国語は何をするんですか?」「早く外国語がしたいです!」と声をかけてくれる子どもがたくさんいます。授業中の子どもたちは、難しいことに対してもチャレンジ精神旺盛で、一生懸命学習に取り組んでいます。そんな子どもたちの姿を見ると、誇らしい気持ちになります。

いちばん幸せなのは、子どもたちの笑顔が見られる時間です。外国語活動では、楽しいゲームをすることが多く、授業中に子どもたちがにこにこしていることがよくあります。しかし、ゲームに限らず、新しく学んだ表現が言えるようになったときや友達とお互いのことを英語で伝え合うことができるときなども、子どもたちはとて

もいい顔をしています。そんなとき、外国語活動で必要なのは、単純な楽しさだけではないと強く感じます。英語を使い、達成感を得られる活動をするのもまた、子どもたちにとって大きな成長の機会となっているのだと思うのです。

今後、外国語専科としての指導力を向上させ、子どもたちにとって、より魅力的な授業ができるようになりたいと考えます。目指すのは、楽しく温かい雰囲気の中、子どもたちが小さなチャレンジを積み重ねながら、少しずつレベルアップしていくことのできる授業です。大好きな子どもたちと、大好きな英語を学ぶことのできる幸せに感謝しながら、一日一日を大切にしていきたいです。



経験と学びの日々



愛南町
久良小教諭
山本 直也
(平九卒)

私が教員採用試験で良い結果だったとの朗報を受けたのは、奈良県で昼食をとっている時のことだった。当時、講師として勤務していた中学校で修学旅行の引率をしている最中のことだ。その時のうれしかった気持ちやその場に一緒にいた先生方が我がことのように喜んでくださったことを今でもはつきりと覚えている。

その次の年の四月から、私の新規採用教員としての生活がスタートした。初任校は住み慣れた南予を遠く離れた東予の中学校だった。そして、それは経験と学びの日々の始まりでもあった。

学校という世界では、小学生・中学生・高校生として十二年間過ごしているはずなのに、教師として過ごす学校は全くの別世界のように見えた。何もかもが懐かしいと同時に新しいことの連続だった。今回はその中で経験し、学んだことをつづっていかうと思う。初任校で印象深かったのは次のようなことである。

初任校は一学年六〜八クラスある大規模校であった。そのため、年度当初に数名の教員が集まり、時間割の編成チームが組まれる。私もその一員として時間割の編成を手伝うこととなった。その中で時間割の編成はただ教科を組み合わせていけばよいのではないことに気付かされた。午前中に空き時間をもたず入れること、先生方の負担をなるべく減らすこと等、紙の上だけではなく、実際の学校生活を考慮に入れて時間割は組まれていた。「時間割を見れば、その学校のことが全てわかる。」という主任の言葉が時間割の大切さを物語っていた。

また、初任校では人権・同和教育が盛んに行われていた。そのため、人権・同和教育について考える機会に恵まれていた。私はそれまで恥ずかしながら人権・同和教育は自分には関係のないことだと思っていた。しかし、校内での研修や校外での学習会で学ぶにつれて自分の考えが間違っていることに気付かされた。「差別は身分制度によって作られたのではない。人の中にある差別する心が作っているのだ。」という考え方を教わった時、自分の中で差別に対する考え方が大きく変わった。学び続けることの大切さを実感した時でもあった。

さらに、初任校では生徒指導に

ついても考えさせられた。それは、学校という組織として生徒指導を行うということである。初任から間もないころ、自分一人の勝手な判断で生徒指導を行い、生徒との人間関係が悪くなったことがあった。全校で共通した指導を行わないといけない事を実感した時であった。また、生徒指導上の問題が起こった時、自分一人では対応するのではなく、他の先生方と報告・連絡・相談をしながら協力することを身をもって学ぶことができた。

初任校で四年間過ごした後、私は生まれ育った南予に戻ってきた。

南予の小学校に赴任した私は特別支援学級の担任をすることになった。特別支援教育に本格的に取り組むのはその時が初めてであった。初任校では一クラス三十五人だったのが、その時目の前にいたのは一人。しかし、その



一人と向き合って学校生活を送っているうちに、自分が今まで児童や生徒一人一人のことをよく見ていなかったことに気付いた。子どもは言葉だけではなく表情や仕草でいろいろなサインを出している。自分はそのサインをどれだけ読み取って、子どもに言葉や表情を返すことができていたか。また、目の前で学習内容が身に付かない子どもがいた時に自分の授業が子どもの実態に合っていないかについても関わらず、子どものせいにしていなかったか。「特別支援教育は教育の原点である」とよく言われるが、そのことを痛感した。その後、異動しながらも特別支援学級の担任を十年経験させていただいた。

そして、現在勤務している学校で、初めての校務分掌を経験することとなる。それは、「体育主任」である。小学生時代、体育が決して得意ではなかった自分にとって、体育主任という役割が果たせるかどうか不安だった。六月から放課後の水泳練習が始まり、九月には運動会練習、同時進行で陸上練習が行われる。練習の計画を立てて、放課後に指導をし、選手を選び、大会に参加する。この一連の流れを行う際に様々な先生方に助けていただいた。体育主任三年目となった今も、周りの先生方に協力していただきながら、貴重な経験を積ませていただいている。

教員になってから二十年が経とうとしている。二十年前の初任者だった頃の自分と今の自分を比べた時にどこが変わったかは実際のところよく分からない。ただ言えるのは今まで経験し、学んできたことは確実に私の中に残っており、教師としての私を作ってくれているということである。今後もいろいろなことを経験し、その度に多くのことを学んでいこうと思う。一日一日をしつかりと過ごしていきたい。

〒798-4110 南宇和郡愛南町御荘
平城四一九一(番地六)

祝・叙 勲

(令和元年十一月三日)

秋の叙勲

☆瑞宝双光章

教育功労

小田 義朗 様

教育功労

赤松 幸雄 様

支部活動報告

八回目を迎えた落語会



南宇和支部 若田 正

(昭五四卒)

私が、南宇和支部の支部長を引き継いで始めた「落語会爆笑僧都寄席」が、退任後三代変わった今も続いており、先日八回目を終えた。

「伝統ある日本文化」の「生の落語」に触れさせ、子どもたちの「生きる力」につなげたい、また、お年寄りにも「生の落語」に触れていただき、笑って健康に過ごしていただきたいと考え始めたものである。

準備や運営については、八回目ということで慣れてはきたが、できるだけ安い入場料での開催を考えているため、同窓会からの援助

以外の資金調達に苦慮している。学習した生涯学習課の「わが里づくり事業」の補助金を利用し、申請書は、過去二回のものをもとに割と簡単に作成することができた。

そして、会場は、僧都地区の「僧都ふれあい交流館」と、二回目となる近くの緑地区の「緑基幹集落センター」の二か所での開催となった。この地区は、「まるごと緑」という組織を立ち上げ、様々なイベントを通して地域の活性化を図っている地区である。嬉しいことに、会場提供だけでなく準備や片付けを手伝ってくれた。おま

けに、懇親会までも用意してくれ、今はやりの「ジビエ料理」を提供してくれたのである。もちろん、愛南町の「海の幸」もバッチリである。

迎えた当日、八回目になる「古今亭菊志ん」師匠の「すどうふ」と「湯屋番」、そして、「金明竹」と「青菜」、四回目になる「桂三幸」氏の「みかんや」と「読書の時間」と「涙をこらえてカラオケを」と「遺産相続」という落語を拝聴した。出囃子をかけ、来場者の表情を興味深く写真に収めた。もちろん、自らも大いに楽しんだのは言うまでもない。



今回は、午後三時開演とした僧都地区の会場に、近くの特別養護老人ホーム「自在園」の入所者を無料で招待し、職員と会わせて六名の方にも来ていただいた。

なんといつでも盛り上がったのが、昨年に引き続きの大抽選会である。師匠たちに、色紙はもちろん手拭いと落語の入ったCDを賞品として用意していただき、二人に抽選していただいた。引いた番号と入場時に渡した番号と照らし合わせ、一致した方に私が景品を配り、落語会がとても充実したものとなった。

入場者数が安定してきたことや予約席が埋まり始めたこと、そし



て、全員が大笑いすることに、やりがいを感じるところである。できることなら、現職の先生方が気分転換や息抜きに会場してくれることと、たくさんの子どもたちが来場してくれることを望んでいる。今後、様々な課題も出てくるだろうが、一つ一つ解決し、十回目二十回目と回を重ねていきたい。



国際理解教育コース同窓会

国際理解教育コースで学んだこと

教員 佐藤 栄作

文学部出身の私が教育学部に赴任してまず感じたことは、文学より教育の方が複雑で面倒だということだった。簡単にいうと、文学は自ら悦に入って楽しめるが、教育は必ず他者に伝えなければならぬ。文学は仲間と語り合っているも許されるが、教育は趣味趣向の異なる者と必ずやりとりしなければならぬ。これはたいへんなところへ来たと思っていたころ、改組によって教育学部内に教員養成を必須としない「国際理解教育コース」が立ち上がることになった。ほっとした？ いや私は、外国語がまったくダメだから、これはもうどうしようもないと諦め気分だったことを記憶している。

短大の国文学科の教員だったときには、小学校の国語教科書を読み返すことなどなかったが、教育学部国語に所属するようになれば読まないわけにはいかない。三十三数年ぶりに小学校の国語教科書に

目を通してみると、いろいろ気になることにいくわした。それは、自分がもはや小学生ではなく日本語を専攻した大人になったからであるが、国際理解教育コースの教員になったことも一因だったと思う。私が引かかったことは、教師用の指導書にも書いていないことが多かった。

まず、「おおきなかぶ」である。これは現在全ての国語教科書に載っているが、読み返すとおかしな話である。まず何と言っても、なぜ「かぶ」なのか。

このことを、国語の教員や小学校教員を目指す学生の授業でなく、国際理解教育コースの授業で取り上げることにした。ロシア語はまったくできないが、この「かぶ」がロシアのある野菜を日本語に訳したものであることは間違いない。ロシア人の画家の描いた「おおきなかぶ」の挿絵の「かぶ」は黄色で、葉っぱも日本の「かぶ

(蕪)」とはまったく違っている。どうも日本とロシアとは植物の種類が違っているようだ。しかし、その野菜を「かぶ」と訳してしまった。現在の国語教科書では一社を除いて、日本人画家の書いた巨大な日本の「かぶ(蕪)」である。色は真っ白なのだ。

国際理解教育コースの授業では、「おおきなかぶ」を取り上げることには一言も言わず、まず、畑でとれる野菜を思いっただけ挙げよ、から始める。トマト、キュウリ、大根、サツマイモ……などが出てくるが、「かぶ(蕪)」が十番以内になることはまずない。平均十七、八番目くらいだ。最近はお豆腐などという西洋料理で使われるから少し順位を上げてきたようにも思うが、われわれ世代にとっては「かぶ(蕪)」といえば漬物だ。私の母方言では「かぶら」というから、私にとって「かぶ」はさらに縁遠い。

この野菜を主役にしたロシアの民話を、日本では全小学一年生が学習する。もちろん、なかなか抜けずにだんだん引く張る人が増えて、ネズミが加わってようやく抜けるというストーリーは面白い。そして、何とんでも「うんとこしょ、どっこいしょ」の掛け声で巨大な「かぶ」を抜く動作をすることを、子どもたちは心待ちにしている。国語が、ひいては学校が

好きになる大人気の教材だ。

教科書の挿絵は、一社を除いて、白い日本の「かぶ(蕪)」になっている。これは、佐藤忠良挿絵の絵本がベストセラーになったからというよりも、黄色いと「かぶ(蕪)」に見えない、黄色い「かぶ(蕪)」はおかしいと、教科書会社自身が考えたか、あるいはそういう保護者からのクレームを予想したからではないか。しかし、白い日本の「かぶ(蕪)」が書かれたことで、楽しい教材ではあるものの、実は得体のしれないお話になってしまった。挿絵の登場人物は日本人には見えない(ロシア人である)のに「かぶ」は日本の「かぶ(蕪)」なのだ。日本の全ての子どもたちが「おおきなかぶ」を学ぶが、日本の「かぶ(蕪)」はちっともメジャーな野菜にはなっていない。日本では漬物にする野菜なのに、まるでトウモロコシが何かに、まるで「あまくなれ」と祈り、日本ではむしろや食べるものではないのに、まるでスイカのよう

に「おおきくなれ」と願う。そもそも、「かぶ(蕪)」はそんなに期待されていない。ほとんどの日本人にとって生活に密着した野菜ではない。一方で、一年生だから、ロシア民話を学んだという記憶もほとんどの子どもたちに残っていない。不思議な定番教材だ。「おおきなかぶ」の方がしっくりくると考えるのが自然ではないか。——というようなことを私は考えた。

このことは、異文化理解教材として「おおきなかぶ」を読み直すべきだという私見を生むことになった。学校教育教員養成課程でも、この考えを開陳しようと思っている(もう一度話してみた)。「おおきなかぶ」以外でも、かえるくんとかまぐんの登場する「おてがみ」(原文は英語、作者はアメリカ人)については「おおきなかぶ」以上に言いたいことがある。こちらについても、国際理解教育コースの授業では毎年話してきた。これからは小学校教員になる学生に話すことにした(もう始めていく)。

教育学部に着任し、国際理解教育コースに関わったお蔭で、国語教科書の定番教材をばーっとは読めなくなった。ツメが甘いから論文になっていないが、いつか「小学校定番教材は実はもつとおもしろい」というような本にまとめてみたいと思っている。

国際理解教育コース、ありがとう。



先輩を偲ぶ

あしあと(3)

過去から現在そして未来へ

(教育学部同窓会百周年記念誌より抜粋)

同窓会事務局

高橋 良弘氏 寄稿

学生気質の変遷

(一) 愛大本部の焼失

昭和三十六年十月三十日、午前一時前、正面玄関を入ったところにあった木造二階建ての愛媛大学本館から出火、事務局・学生部・教育学部管理棟延四百六十六坪および、社会科教棟三百十坪を焼失した。写真はそのようすを伝える貴重な資料である。灰じんに帰したのが本館であっただけに、失った資料もまた膨大であった。余談だが、「教育学部のあゆみ」を書くために大学を訪れても、この火災のためにほとんど資料らしい資料



愛大本部焼失

「学生気質の変遷」といったところで、ほんの断片を物語ろうとするだけであり、真実の「あゆ

み」が書けない筆者の言い訳でもある。一種の漫談だと思って読んでいただければありがたい。

(二) 学生運動

昭和四十三年から四十四年にかけて、急速に学生運動が高まってきた。日本経済の高度の成長下で精神的空白を感じた学生の心情とベトナム戦争、安保改定などの反戦運動とか何重にもダブって起こった現象だ、(朝日新聞社説)などと言われているが、東安田講堂占拠と警察機動隊の導入に国民が驚く間もなく、学生運動は全国に野火のように燃え広がった。

過激派の学生は大学をバリケードで封鎖し、授業は中止される、火炎ビン・角材・投石・ヘルメット・内ゲバ、そして、機動隊の導入をくりかえす、広島大学に引火したと思ったとたん、まさかと思っていたわが愛媛大学にも火の手が広がった。正面玄関前は大きな立看板がずらりと並んだ。

四十四年六月に愛大本部封鎖、次いで九月の学長室占拠、十一月に法文学部本館の封鎖と三度の封

鎖をはかる。三度目の時、スト反対派による逆封鎖があったことは、また記憶に生々しく残っていることであろう。四十五年三月の入試は、ついに機動隊に守られて行われるという悲しいことになった。

また、四十六年六月には授業料値上げ反対や沖縄返還協定反対のため理学部教棟が水攻めになったりする。法文学部の愛真会、全共闘が中心になったのであるが、教育学部の学生の中からも逮捕者が出た。

学生運動は、愛大の初期にも見られた。昭和二十六年、教員不採用の学生のため、県庁へ押しかけて団交を迫った学生たちもいた。今、静かな城北キャンパスに、時々見かける立看板は、その学生運動の名残であらうじゃ。

(三) 卒業式と入学式

昭和二十八年三月二十日の第一回卒業式は、持田教場の章光堂で行われた。学生のほとんどは詰めえりの学生服であり、背広姿がちらほら散見される。それが三十八

年の卒業写真になると、逆にその大多数は背広姿であり、詰めえり姿が珍しくなっている。十年一昔というが、第一回の女子卒業生二名に対し、女子学生が増加しているのも驚きだが、ここではまだすべてが洋服であり、和服姿は全く見られない。



教育学部卒業記念 城北教場 (昭和38年3.20 教養部前)

ところが、昭和四十六年ころから女子学生の着物姿がぼちぼち見えはじめ、それがたちまち広がってきて、昭和五十年三月二十日の卒業式となると、女子学生のはなやかな和服が目目をひく。

最近の卒業式は、たくさんの父兄の臨席を得て、さしも広い体育館もいっぱいになってしまふとい

う。入学式に付き添ってくる父兄は約千人に及んだとか。

県外の学生が多くなったことも、その原因であろうし、下宿探しを兼ねた親心もあるう。しかし、だれ一人として就きそう者のいなかった草創期ごろの入学式や卒業式に比べて、今昔の感にたえない。現代っ子の過保護的な現象は、こうした大学の入学式風景にも見られるのではなからうか。

下宿と言え、薪をくべ、はがまで飯をたき、七輪に茶びんをかけて湯をわかした、かのわびしい学生時代を思い起こす先輩も数多いことであろう。それが、ガス器具も完備したこのころとなつて、自炊する学生がきわめてまれだと



うるわしき青春 1

聞く。なるほど大学構内にはりっぱな食堂があり、市価よりずいぶん安い値段で食事ができる。炊飯に食われる時間が惜しいのである。家賃二万五千円のマンションに入り、カラーテレビ、ステレオ、冷蔵庫を持ちこみ、優雅な学生生活を楽しんでいる学生もあるというから、時代も変わったものである。



うるわしき青春 2

(四) 女子学生の進出

昭和二十八年の第一回卒業式は、城戸さんと、三年生の田中さんの二人の女子学生だけであった。二年課程の初等科には女子学生も多かったが、第二回卒業の四年課程では森さん一人の女子学生であった。

しかし、その後次第に女子学生が進出し、現在では教育学部の学生の中、七割を女子が占めるようになった。小学校教員養成課程に多いのは今も昔も変わらないが、中学校教員課程でも、たとえば、国文学専攻生などは、ほとんどが女子学生である。昭和三十四年に設置された特別教科教員養成課程音楽科も、当初は男子学生も多かったが、これはまた女子学生に追われ、ついに五十一年度特音科の男子入学生はわずか一名であったという。

欧米なみに、義務教育にたずさわる教員のうち、女性が絶対多数を占めだしたこの現象をわたしたちはどう受け取るべきであろうか。最近の入学生を見ても、この傾向はますます強くなっていくようである。

城北キャンパスの施設は、このところいよいよ充実発展してきた。もはや廊下のきしむ音に神経をわずらわすこともなくなった。そこには真剣な授業が毎日展開されていることだろう。女子学生の



うるわしき青春 3

多い教室や研究室は、初期のころと違って、いつもきれいに清掃され、整頓されていることだろう。

本来の教育を背負って立とうとする若き女子学生さん、あなたの座っていた机の中に、パンの食いつ残しや牛乳の空びんなどが転がっていたりはしないでしょうね。百周年記念のこの年は、国際婦人年でもあります。女子学生のいっその努力を願い、あわせて男子学生の奮起を促したい。

(五) 教育実習

教育することの苦しみとよろこびを身をもって味わうことができないのが、教育実習であろう。付属小・付属中で、はじめて「先生」と呼ばれた時のおもはゆさ。教材

研究に精を出し、教案を練り上げ、汗をかきかき教壇に立った日の感激は、今も昔も変わらないものである。敏感に反応する生徒たちを前にしたとき、これまでの過保護的な自己の甘さをいやというほど見せつけられるのではなからうか。きびしい人間関係の中で、教師としての自覚を持ちはじめたとき、そこには現代っ子気質の自己中心的なものの方・考え方は否定され、あるべき姿のなにものかを思い出してくれるのではなからうか。教生旅行の思い出、それはまたなつかしい思い出として、あざやかによみがえってくるのだらう。



会員の声

「教行信証」の序

— 私の現代日本語訳 —



吉原 宏文

(昭四二卒)

年二回発行される同窓会報に投稿することは私の生きがいであり、それが掲載される度に私の学力が向上し、学問が深まっていくことを実感しています。まことに母校愛媛大学教育学部に心から感謝しています。私が四年間勤めた小学校教師を辞め仏門に入ったことは、今思い返しても尋常なことではなかったと反省しています。安定し将来も保障された教職から、「親を捨てる気か」と泣いて頼む父の猛反対を振り切り、未知の仏教界に転じたことは人生の

一大冒険のスタートでもありました。当時、日本中を震撼させた作家三島由紀夫氏の、自衛隊総監室での割腹自殺事件がありました。お別れ会の席上、元同僚の先生から「吉原先生の行動は三島由紀夫に似ているよ」と言われたことを想起します。親鸞聖人も九歳で出家され、命がけの決断で比叡山に登り、厳しい修行と勉強に励まれ、ついに法然上人の専修念仏に帰せられました。そして、その後の大弾圧の中で「教行信証」を完成させたことは全く驚愕すべきことで

あります。私は、その序文を鈴木大拙博士の英訳文を参考にして、現代日本語訳にしてみました。もし誤訳して、聖人の御心を損ねはしないかと案じつつも敢えて実行しました。皆様も各人でよい訳文をつくってみて下さい。

(原文)

「竊かにおもんみれば、難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり」

(訳文)

真実を求めて、深く深く我が人生を反省してみると、全ての人々を救済するという阿弥陀如来の本願は、私(親鸞)の思案を遥かに超えたものであり、渡り難い迷いの海を乗せて渡してくれる大きな願船である。また、阿弥陀仏の光明は融通無碍(全てに行きわたって通じ、少しも渋滞しないこと)であり、無知の暗闇を照らす全てに勝れた知恵の太陽である。

「しかればすなはち淨邦縁熟して、調達(提婆達多)、闍世(阿闍世)をして逆害を興ぜしむ。淨業機彰れて、釈迦、韋提をして安養を選ばしめたまへり」

こうして、清淨の国土を志向する条件が調ってきたそのとき、釈尊の高徳を妬みことごとく敵対する悪友・提婆達多が阿闍世王に人道に背くような大罪を犯すよう唆した。そこで、釈迦牟尼仏が、悲嘆にくれている韋提希夫人の心を平安と幸福の国土に向けさせるためにこの沙婆世界に出現された。実に、ここにおいて、清淨の国の教え(浄土教)を受け容れる心の準備(機縁)ができた人々が彰われてきたことを証してくれるのである。

「これすなはち権化の仁(人)、斉しく苦悩の群萌を救済し、世雄の悲、まさしく逆謗闍提を恵まんと欲す」

それゆえに、このような人間の姿に化身した人々の慈悲深い心は、苦悩で踴っている全ての存在者を救済することをめざす。また、世界で最も勇猛な仏の哀れみ深い心は、極悪人(五逆)、正法を冒瀆するもの(誹謗正法)、さらには、功德のかけらもないもの(一闍提)にさえ救いの手を差し伸べられるのである。

「ゆゑに知んぬ、円融至徳の嘉号は悪を転じて徳を成す正智、難信金剛の信樂は疑を除き証を獲しむる真理なり」と

ゆえに、完全にして互いに妨げられることなく一体となり、最高の善功德を体現しているめでたい名前(南無阿弥陀仏の名号)は、罪悪(氷)を功德(水)に変える卓越した知恵である。そして、考えられる限りのありとあらゆるものを超越した金剛石のような賢固な信心は、心に潜むわずかな疑念

をも消し去って悟りに入れる真理である。

「しかれば凡小修し易き真教、愚鈍往き易き捷徑なり。大聖一代の教、この徳海にしくなし」

こうして、この教えは、心が狭く無力な我々が実践することのできる唯一のやさしい教えである。また、愚かで無学な我々が目指すことのできる最も近い道である。

偉大な聖者が在世中に示された全ての教えとその功德の大海に勝るものはない。

「穢を捨て浄を欣び、行に迷い信に惑ひ、心昏く識寡く、悪重く障り多きもの、ことに如来（釈尊）の発遣を仰ぎ、かならず最勝の直道に帰して、もっぱらこの行に奉へ、ただこの信を崇めよ」

清浄でありたいと願ひ、不浄を捨ててしまいたいと思っているもの、正しい実践と正しい信心につ

いて途方に暮れているもの、心が暗く理解力が不十分であるもの、罪惡と因縁が重く申し掛かつて苦しんでいるもの——これら全員が、ことのほか「急ぎ浄土に來たれ！」という釈尊の勧めを求めて忘れることがないように、また、最も勝れた真理の道を常に心の支えにし、この行に奉仕してこの信だけを受け容れるように。

「ああ、弘誓の強縁、多生にも値ひがたく、真実の浄信、億劫にも獲がたし。たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ」

まことに、人が生まれ変わり死に変わり（輪廻転生）して、どれだけ多くの人生を体験しようとも、如何なる人をも救いとうといふ阿弥陀如来の本願によって幸せな境遇にある自分自身を見出すことは非常に稀な事であり、真実への純粹な信心を獲得することは、無限ともいえる長い時間（劫）を

経巡ろうとも、実に困難なことである。過去の生涯（前世）において、最も望ましくありがたい縁（宿縁）がなかったならば、どうして浄土への信心を懐くようになることができようか、また浄土への行証に生きることができようか。

「もしまたこの度疑網に覆蔽せられば、かえつてまた曠劫を経歴せん。誠なるかな、摂取不捨の真言、超世希有の正法、聞思して遅慮することなかれ」

もし万が一、「今・ここ」なるこの絶好の機会（チャンス）を疑惑の網（ベール）によって覆われ見逃すようなことがあれば、また次の果てしない長時間（劫）を空しく流転することになるであろう。「全ての人を救い取り、誰一人として取り残されることはない」というこの声明は絶対であり、実に、正法は驚嘆すべきものであり、この娑婆世界の全てのものを超えている。従って、正

法に耳を傾け、思い巡らすことに躊躇してはならない。

「ここに愚禿釈の親鸞、慶ばしいかな、西蕃・月支の聖典、東夏・日域の師釈に、遇ひがたくして、いま遇ふことを得たり、聞きがたくしてすでに聞くことを得たり」

ここに、私、釈尊の弟子である親鸞、一人の無知無学な老人が、インドと中央アジア（現在のパキスタンやアフガニスタン地域）に

伝承された聖經、そして中国と日本の教師達によつて解釈された論書をたまたま手に入れたことは、ああ何という幸運なことであろうか。このような聖經を入手することとは大変難しいことである。しかし、今私は手にしている！これらの教訓を聞くことは非常に稀なことである。しかし既に聞くことができた！

「真宗の教行証を敬信して、こと

に如来の恩徳の深きことを知んぬ。ここをもつて聞くところを慶び、獲るところを嘆ずるなりと」

私は、心底、浄土真宗の教行証を敬信することを表明する。そして、如来達によつて授けられた深い善意に恩恵を蒙っていることを宣言したい。また、踊り上がるほどの大きな喜びを得た。私が聞いたこと、得たことの全てを誉めそやしていることを。

二〇一九（令和元年）十一月十日（日）
令和天皇即位礼・祝賀御列の儀の日

731-0135

広島市安佐南区長束
一丁目一八・五一五

（七十七歳）



放送大学入学生募集のお知らせ

放送大学では、二〇二〇年四月入学生を募集中です

〈募集期間〉

二〇一九年十一月二十六日(火)～

二〇二〇年三月十七日(火)

放送大学は、テレビなどの放送を利用して自宅で学べる通信制の大学です。

放送大学では心理学・福祉・文学など幅広い分野を学べますが、同窓会員特に現職の方々は次に掲げる教育関係の免許資格取得などができます。

○放送大学の大学院を利用して、**専修免許状**の取得が可能です。

○放送大学の科目を利用して、**特別支援学校教諭免許状**の取得が可能です。



放送大学

教養はエネルギーだ。

一科目からでも学べます

2020年度4月入学生募集中！
(2020年3月17日まで)

問合せ先 愛媛学習センター
TEL 089-923-8544

●インターネットで資料請求・出願できます。●資料請求専用フリーダイヤル
放送大学 www.ouj.ac.jp ☎ 0120-864-600

○放送大学の科目を利用して、**司書教諭資格**の取得が可能です。

○放送大学の講習を受講して、**教員免許更新**が可能です。

資料を無料で差し上げております。お気軽に愛媛学習センターまでご請求下さい。

愛媛大学校友会

をご存じですか？



愛媛大学校友会はすべての学部垣根を越えて組織された団体で、同窓生をはじめ、学生及びその保護者、現職及び退職の教職員を会員として、平成16年に設立されました。

校友会は、①学生サークルへの援助 ②就職活動旅費の支援 ③留学渡航費の支援 ④学生図書への寄贈 ⑤入学生・卒業生への記念品贈呈 ⑥子規俳句カレンダーの作成 ⑦新社会人の歓迎会など、主に学生支援事業を行っています。

また、同窓生が主体となって組織された首都圏支部・近畿支部・中国支部では、講演会や懇親会を開催し、皆さんの参加をお待ちしています。

同窓生の皆さんは既に校友会会員ですが、会員情報のご登録がないと大学の近況や校友会報の送付、校友会イベントのご案内が出来ません。是非、下記によりご登録いただき、校友会活動にご参加くださいますようお願いいたします。

EUAA

Ehime University Alumni Association

<愛媛大学校友会事務局> <http://koyu.ehime-u.jp/>

〒790-8577 松山市文京町3番 校友会館2F

Tel 089-927-8610 E-mail: office@koyu.ehime-u.jp

表紙作品について

◆ 作品タイトル

「寒椿」(二〇二〇)

作者

川井 正

(昭二九卒)



題名は「寒椿」です。これはわが家の庭にあった寒椿で、これは版画の題材になると思い、まず白黒版画にするか、多色版画にするか考えた末、白黒版に決めました。でも、花の部分だけはピンクにし、ベニヤ板三枚に彫り、完成させました。市民美術展に出品したので会場作品をみてみると、ピンクと白、黒のバランスがよかったと思います。版画は、作者の想いをどのように表現するか、題材がしに、時間がかかります。わたしの場合、巨樹にするか流れにするか遠いところにある場合、現場に行つて決めるまでが大変です。

八十路になったいま、継続は力なりとか、版画の制作を続け、自分の想いを作品にこめたいと思います。版画をすることは、自分にとって生きることです。

部活動紹介



愛媛大学写真部



私たち、愛媛大学写真部の主な活動は、一眼レフカメラ・コンパクトデジタルカメラ・スマートフォンなどを使用して撮影した写真を展示することです。他にも、愛媛大学リレーマラソンや愛媛コレクション、他サークルの定期演奏会など、学内外から依頼を受け、カメラマンとしての活動を行っています。今年度は新入部員が増え、現在は三十一名で活動しています。前年度に引き続き、関係者の方々のご協力により活動することができ、大変感謝しております。今回は平成三十一年度の活動について紹介させていただきます。

【定期集会】

愛媛大学写真部では、毎週火曜



日の十八時頃から愛媛大学の共通講義棟の教室を借りて定期集会を行っています。この定期集会では、撮影依頼の分担をしたり、展示会・撮影会などの行事の計画を立てたりしています。定期集会終了後は、写真発表会とプチ講習会を行っています。この発表会と講習会では、気に入った写真や失敗した写真を

発表しあったり、上回生によるカメラの使い方や写真を撮る上でのアドバイスなどを行ったりすることで、新入部員のサポートと撮影テクニックの向上を目指しています。

【第六十九回愛媛大学学生祭】

令和元年の十一月九日、十日に愛媛大学で学生祭が開催されました。写真部では毎年、部員たちが撮影した写真を展示しています。また、今回は新たな試みとして、撮影会などの風景をエル版用紙に印刷し、ボードに張り付けて展示



することで私達の作品だけでなく、私たちの行っている活動の様子を知っていただけるようにしました。この試みは予想より反響が良かったので、今後も続けていこうと思っています。今回の学生祭の展示場所は、以前と異なり、共通講義棟の四階という足を運びにくい場所になっていたにも関わらず、二日間でおおよそ三百人も

の方々に来場していただきました。学生祭という多くの方々の目に触れ、たくさんの方々の評価をいただく機会は、多くの部員にとって良い経験となりました。また、記入していただいたアンケートの結果をもとに、来年度の学生祭がさらに盛り上がるよう改善していきます。

【第二回二時間リレーマラソン大会】

令和元年十二月十四日に愛媛県総合運動公園でリレーマラソン大会が開催されました。今年度から、八名がカメラマンとして参加しました。静止した被写体を撮る部員

が多いため、走っている人や人の表情などの変化の激しい物を撮影することは部員にとって良い刺激になったと思います。

今年度は写真部にとって大きな変わり目となりました。部員の数も大幅に増え、部の評価も上がりました。来年度も活動の質を向上させていくと共に、皆様に楽しんでもいただけるような作品が出来るよう、より一層、努力していきます。



会報の送料納付

について

会報の個人宛発送は、送料を各自で負担していただくことになっております。

出費多端の折柄恐縮ですが、未納の方は、左記要領で納付方お願い申し上げます。

記

①一年間五〇〇円で、二年間分ずつ収めるようになっていきます。

②二年ごとの更新は、煩さなので、何年間かを、まとめられる方もあります。

納付期限 毎年三月三十日までとし、二年毎に更新する。

送金方法 郵便為替・現金書留・郵便振替で

振替口座番号

〇一六四〇一七二七五四
送り先 七九〇一八五七七

松山市文京町三

愛媛大学教育学部同窓会

領収書は、振替用紙をもつて、かえさせていただきます。

振替用紙には、左記のように「懇親会会費」「会報送料」「寄付」と記載しています。送金の際には、該当の項目に✓をいれください。なお、恐れ入りますが、卒業された年もご記入をお願いします。

払込取扱票

02	016407	2754	金額	科目	備考
愛媛大学教育学部同窓会					
☐ 同窓会懇親会会費 ☐ 会報送料 ☐ 寄付 () 年 卒					
日 月 年 様 印					

用紙は同窓会懇親会が開催される年の二月発行の会報にチラシと一緒に皆さんでお届けしますが、必要な場合は郵送いたします。郵便局でも常備されていますが、前述の記載はしていない用紙になります。また、郵便局で記入して送る場合は赤色の振替用紙をお使いください。

【お知らせ】

第十七回教育学部同窓会懇親会
期日：令和二年八月二十二日(土)
場所：ANAクラウンプラザホテル松山

寄付者名

令和元年6月～12月

横手光紘様
黒田伸夫様
石堂鹿夫様
高橋愛由美様
池田辰夫様
小島奈美子様
西田裕至様

ありがとうございました。

敬弔 (物故会員)

(4月～12月)

(死亡年月日) (氏名)

長曾我部要 (昭22・愛師) 23・1・27
徳永輝夫 (昭18・青年) 29・10・3
近藤朝子 (昭14・女師) 30・7・19
津田民生 (昭32・愛大) 30・7・19
佐伯森文 (昭25・愛師) 31・1・7
菊池雅典 (昭40・愛大) 31・1・18
渡部 績 (昭24・愛師) 31・1・19
高槻貞夫 (元教育学部教授) 31・3・3
米田 敏明 (昭23・愛師研)

1・5・10	玉田 浩幸 (平4・愛大)	1・8・21	中島 正 (昭19・青師)
1・5・12	池田 經廣 (昭23・愛師)	1・8・28	越智ちえみ (昭58・愛大)
1・5・18	西山 俊雄 (昭22・愛師)	1・9・2	堀内シゲコ (昭12・女師二)
1・5・29	松本 嘉穂 (昭14・県師二)	1・9・4	鈴木 洋一 (昭32・愛大)
1・6・1	河村 利則 (昭26・愛大)	1・9・22	藤本 精一 (昭26・愛大)
1・6・5	宮武 宏 (昭20・青師)	1・9・29	舩久 英賢 (昭28・愛大)
1・6・11	上杉 潤 (昭28・愛大)	1・10・10	升田 守 (昭25・青師)
1・6・14	大野タミ子 (昭25・青師女)	1・10・12	藤田 政子 (昭26・愛大)
1・7・2	足立 桂輔 (昭28・愛大)	1・10・15	今井 貞男 (昭24・研究)
1・7・5	濱田 寛 (昭25・愛師)	1・10・15	近藤 良伍 (昭25・青師)
1・7・13	重岡 恒延 (昭38・愛大)	1・10・15	橋本 幸 (昭24・愛師研)
1・7・15	友石 甫 (昭29・愛大)	1・10・22	大黒美知子 (昭24・青師女)
1・7・25	金子 数美 (昭25・愛師)	1・10・22	高岡 カノ (昭17・女師二)
1・7・26	酒井 節子 (昭46・愛大)	1・10・26	西島 節子 (昭34・愛大)
1・8・1	佐々木 康 (昭35・愛大)	1・11・1	木村 卓生 (昭35・愛大)
1・8・14	白旗 久道 (昭34・愛大)	1・11・4	塩崎 浅 (昭24・青師)
1・8・15	大西 重吉 (昭27・愛大)	1・11・4	八木 義則 (昭32・愛大)
1・8・19	藤田ヤエ子 (昭20・愛師女)	1・11・16	野本 利一 (昭28・愛大)
1・8・20	西田 瑞穂 (昭24・研究)	1・11・20	藤田 行信 (昭26・愛師)

会員写真館



会員の皆さんが撮った写真を紹介するコーナーです。それぞれの地域や会員の皆さんが何気なく撮った写真を事務局にお送りください。今回は在校生を中心に掲載しました。



灯



彩



みんなのアイドル

上段左：暗い海に浮かぶヨットと工場夜景の光の組み合わせが気に入り収めました。

撮影者：宮地 玲央

上段右：三津浜の花火大会です。開幕のシャッターチャンスを逃さずに捉えました。

撮影者：木戸 幹太

下段：カメラを向けた瞬間にポーズを取ってくれました。

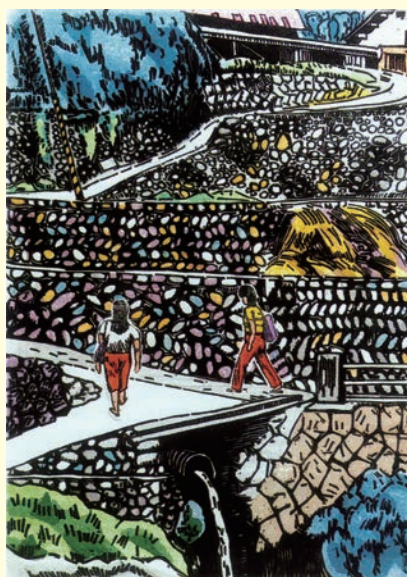
撮影者：篠田 昌明

文芸欄

今回は表紙の「寒椿」の版画を制作された川井様の版画集の中から3点を事務局で選び掲載いたしました。



翔



故郷に帰った日



午後の古町駅